

## 『インノケンティウス3世業績録』の著者について

尾崎 秀夫

## はじめに

教皇インノケンティウス3世(在位1198～1216)については『インノケンティウス3世業績録*Gesta Innocentii III*』(以下、『業績録』と略)という伝記が遺されている<sup>1</sup>。これは問題の少なくない史料である。というのは、1208年までで終わり、その後の8年間については記述がなく、著者も分からず、「謎に満ちている」、「偏向的」、「聖者伝」、「親教皇的」などと非難されてきたものだからである<sup>2</sup>。

しかし、近年、この史料は見直されている。B. Boltonは、「無視するには重要すぎる」という印象的な表題の論文で、『業績録』を問題があるにせよ、インノケンティウス3世の活動をより正しく評価するために重要な史料である、としている<sup>3</sup>。J. Sayersもこれを史料として高く評価している<sup>4</sup>。

『業績録』はミーニュの『パトロロギア・ラティーナ』で100頁以上に及ぶ史料である。そこで扱われている問題についてはかなり詳細に記されている。この史料の信頼性を明確にするためには、『業績録』の著者を明らか

にする必要がある。Boltonは誰とは言わず、おそらく教皇自身の側近で、彼に共感し、協力した人物としている<sup>5</sup>。ではそれは誰なのか。彼はどのような活動をして教皇を支えたのか。本稿では、J.M. Powellの見解を参考にしながら、『業績録』の著者を検討したい<sup>6</sup>。

## 1. 『業績録』の内容

『業績録』はインノケンティウス3世の伝記である。しかし、それは彼の生涯を客観的に過不足なく述べたものではない。1208年で終わっているだけでなく、それ以前の事柄についても叙述に濃淡があり、詳述していることもあれば、簡単にすませたり、ほとんど言及していないこともある。では、『業績録』ではどのような事柄が扱われているのかを見てみよう。

まず、ロタリオ・ダ・セーニすなわちインノケンティウス3世の生まれについて記述する。両親の名前と家系、それにローマ、バリ、そしてボローニャでの教育について述べられている<sup>7</sup>。やがてロタリオは教皇庁入りする。グレゴリウス8世のもとで助祭に叙品され、クレメンス3世に27才のときに助祭枢機卿に任命される。枢機卿時代、彼は自分の教会である荒れ果てていた聖セルジョ・エ・バッコ教会を修復した。常に王道を歩み、左右にぶれることなく、枢機卿たちと争うことなく議論し、いかなる派閥にも加わらなかったが、皆が彼の昇進を予想し、期待した、という。

ケレスティヌス3世の死の当日、教皇選挙が行われた。彼の選挙の状況は、たとえばロジャ・オヴ・ハウデンの記述などより、よほど正確だと思われる<sup>8</sup>。『業績録』によると、選挙では票は分かれたが、ロタリオが最多得票であった。ハウデンも、ジョヴァンニ・ダ・

<sup>1</sup> テキストは Migne, *Patrologia Latina* (= *PL*) 214, cols.17-228. 英訳は *The Deeds of Pope Innocent III*, tr. by J.M. Powell, The Catholic University of America Press, 2004 (= *Deeds*).

<sup>2</sup> B. Bolton, Too important to neglect, *The Gesta Innocentii PP III*, in: *Church and Chronicle in the Middle Ages: Essays presented to John Taylor*, ed. G.A. Loud & I.N. Wood, London: Hambledon Press, 1991, p.90.

<sup>3</sup> Bolton, *op. cit.*, p.90.

<sup>4</sup> J. Sayers, *Innocent III: Leader of Europe 1198-1216*, Longman, 1994, pp.7-8.

<sup>5</sup> Bolton, *op. cit.*, pp.90-91.

<sup>6</sup> J.M. Powell, Innocent III and Petrus Beneventanus, in: *Pope Innocent III and his World*, 1999, Hofstra University, pp.51-62. *Deeds*, p.xiii.

<sup>7</sup> *PL*, 214, cols.14-18.

<sup>8</sup> *PL*, 214, cols.18-21. H. Tillmann, *Pope Innocent III*, 1954, p.9, n.11. Roger of Howden, *Chronica*, 4, Rolls Series 51, 1871, p.32

サレルノが10票獲得したが、2回目の選挙を辞退してロタリオに譲ったと伝えているので、ロタリオが多くの票を集めたことは事実であろう。37才という彼の若さが不安視されたが、倫理的誠実さと学問への精通が決め手となって、皆が彼で同意した。

登位後については、まず教皇国家回復政策が語られる<sup>9</sup>。登位前、神聖ローマ皇帝ハインリヒ6世はドイツと南イタリア、シチリアを掌握し、教皇国家への侵入を開始した<sup>10</sup>。1197年9月末のハインリヒの急死によって最悪の事態は免れたが、その直後に登位したインノケンティウス3世の最初の行動が教皇国家の回復と南イタリアのドイツ人勢力への対抗であった。インノケンティウスはローマの都市長官ピエトロ・ダ・ヴィーコに忠誠を誓わせ、中部イタリアからマルクヴァルト・フォン・アンヴァイラーやコンラート・フォン・ウルスリンゲンら帝国勢力を退けた。

また南イタリアでは、アンコーナ辺境領からシチリア王国に移ったマルクヴァルトに対抗、彼の死後主導権を握り、1208年、サン・ジェルマーノに伯や領主、都市の主要な人々を招集し、シチリア王国の平和と防衛について取り決めを行った。

それから『業績録』は、インノケンティウスの教皇庁での活動に目を向ける<sup>11</sup>。教皇は、まず教皇庁職員が手数料を受け取ることを禁じた。『業績録』はインノケンティウスがラテラノ宮殿内の両替商の机をひっくり返したという。これはもちろん、福音書に描かれたイエスの行動を模した描写である<sup>12</sup>。

インノケンティウスは教皇庁で多くの裁判をこなし、1週間に3回、コンシストリウムを開催して、告訴された重大な問題を審理した。皆が教皇の正確さと思慮深さに驚き、彼の話を書くことで学校より多くのことを学んだ。そのため、教皇庁には世界中から多くの問題が訴えられるようになった、という。ま

<sup>9</sup> *PL*, 214, cols.21-80.

<sup>10</sup> インノケンティウス登位時の政治状況については、西川洋一「初期シュタウフェン朝」『ドイツ史1』所収、成瀬治、山田欣吾、木村靖二編、山川出版社、1997年、247～250頁。山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』、白水社、1996年、201～210頁。

<sup>11</sup> *PL*, 214, cols.80-89.

<sup>12</sup> 「マタイ書」第21章12～13節。「マルコ書」第11章15～17節。「ルカ書」第19章45～46節。「ヨハネ書」第2章13～17節。『聖書 新共同訳』、日本聖書協会、1989年参照。

たインノケンティウスは司教に対する統制も強めた。

インノケンティウスの人柄を示すエピソードも記されている。たとえば、インノケンティウスが教皇庁の職員に手数料などを要求しないよう命じたことや、ラテラノ宮殿内から両替商を追い出したこと<sup>13</sup>、教皇領などでの慈善活動<sup>14</sup>などは、内部の者だからこそ書いたことであろう。

教皇は、一貫して左右にぶれることがなく、人によって差別せず、贈り物で判断を変えたりしない人物として描かれている。たとえば、罰せられたヒルデスハイム司教コンラートが銀の器を教皇に贈って赦しを願った時、インノケンティウスはそれを迷いつつも受け取ったが、赦すつもりはなかったので、より高価な金のカップを贈って司教の願いを退けた、という<sup>15</sup>。インノケンティウスは銀の壺くらいで買収されない、清廉潔白な人物として描かれているのである。

次は十字軍の準備である<sup>16</sup>。1187年にアイユーブ朝のサラディンによりエルサレムを奪取されて以来、十字軍は緊急の課題となっていた。聖地支援のために聖職者に教会収入の40分の1を、枢機卿には10分の1の支払いが命じられた。また十字軍士には全贖宥が与えられるとした。

フランスには助祭枢機卿ピエトロ・カプアーノを派遣し、民衆に十字軍を勧説させるとともに、フランス王とイングランド王とを和解させること、フランス王に情婦と別れて正妻のインゲボルクとよりを戻させることを命じた<sup>17</sup>。王の結婚問題についてはかなり詳しく書かれている。

その後、ポルトガル王レオンの近親結婚、ノルウェーを征服したスヴェレの問題に言及した後、東方の問題、すなわち十字軍や教会統一問題を中心に、ワラキア、ブルガリア、アルメニア、そしてハンガリーなどの問題に言及する<sup>18</sup>。

この部分にはかなり多くのスペースが割かれ、第60章から第122章の63章を使ってい

<sup>13</sup> *PL*, 214, col.80.

<sup>14</sup> *PL*, 214, cols.196-228.

<sup>15</sup> *PL*, 214, col.87.

<sup>16</sup> *PL*, 214, cols.89-91.

<sup>17</sup> *PL*, 214, cols.91-103.

<sup>18</sup> *PL*, 214, cols.119-125.

るが、叙述法が大きく変わっている。叙述は短くなり、教皇がやりとりした書簡の掲載が中心で、あたかも書簡集のような形になっているのである。

その後、『業績録』は1204年にローマにやってきたアラゴン王ペドロ2世の戴冠式について述べる。この部分から叙述中心に戻っている<sup>19</sup>。

『業績録』の最後の部分は、少し混乱しているようである。Powellが言うように、『業績録』著述のために集めていた材料を、著述を続けられなくなって急いで詰め込んだためかも知れない<sup>20</sup>。教皇国家での動向を記した後<sup>21</sup>、ある修道院の危機を救ったことが記され<sup>22</sup>、突然リヴォニア教会の状況に話題が飛んだかと思えば<sup>23</sup>、すぐにイタリアに戻り、トーディの混乱の収拾<sup>24</sup>、さらにラヴェンナ大司教区や中部イタリアでの諸問題について述べる<sup>25</sup>。

次にハンガリーでの問題について語られる。インノケンティウスは聖マリア・イン・アキロ助祭枢機卿グレゴリオを特使として派遣して、イムレ王と弟のアンドラーシュ公を和解させた<sup>26</sup>。これは時間的にはだいぶ遡っており、教皇登位後まもない1199年から1200年のことである。

それからミラノとパヴィーアに講和締結について簡単に言及した後、英仏間の仲裁について述べる。教皇は、カサマーリ修道院長を派遣してフランス王フィリップ2世とイングランド王ジョンとの和平の回復に努め、モー教会会議を開催した<sup>27</sup>。しかしジョンは使者さえ派遣せず、和解は成立しなかった。1204年のことである。

インノケンティウスはあちこちの教会の改革に努め、問題のある多くの高位聖職者を罷免した<sup>28</sup>。

それからイングランド王ジョンとの、カンタベリ大司教選任問題を原因として始まった

有名な闘争について詳しく語られる<sup>29</sup>。教皇が推薦したスティーヴン・ラントンをジョンが拒否したため、インノケンティウスはイングランド王国全体を聖務停止令下に置いた。

『業績録』は、ジョンが教皇に送った書簡についてスティーヴンに知らせる1208年3月の教皇の書簡でこの件についての記述を終えており、この問題のその後については書かれていない。

ここからは教皇をめぐるローマ市内での動きが詳述される<sup>30</sup>。この部分は時期的には1201年～1204年頃のことであり<sup>31</sup>、インノケンティウス3世の重病については以前にも言及されていることと重複している<sup>32</sup>。

混乱を何とか収拾した後、教皇は市民にさまざまなものを施し、教会や修道院を修復し、聖具や装飾品などを贈った<sup>33</sup>。ここには施し物や贈り物が詳細に記載されている。また、ヴァチカンの宮殿とラテラノ宮殿の改築・増築も行った。

次に、インノケンティウスによる聖職者の昇進が記録されている。最後に、多くの教会や修道院への寄付、孤児や寡婦、貧民への施しが記され、教皇の慈悲が強調されたところで、『業績録』の筆が置かれている。

このように『業績録』は、インノケンティウス3世の伝記として中途半端である。記述は1208年頃で突然終わっており、インノケンティウス時代後半は記されていない。それだけでなく、前半の重要な問題が過不足なく扱われているわけでもない。たとえば、登位後の南イタリアでのドイツ勢力との闘争には詳しいが、帝位継承争いについてはその開始について語るのみで、ほとんど扱っていない。在位期初期のファミリアーティや三位一体修道会の承認にも触れていない。教会・国家関係にかかわる重要な教皇令などもほとんど言及されていない。

しかし、先に述べたように、『業績録』は今日史料としての重要性が見直されている<sup>34</sup>。

<sup>19</sup> PL, 214, cols.119-125.

<sup>20</sup> Deeds, p.xlii.

<sup>21</sup> PL, 214, col.162.

<sup>22</sup> PL, 214, cols.162-164.

<sup>23</sup> PL, 214, cols.164-165.

<sup>24</sup> PL, 214, cols.165-166.

<sup>25</sup> PL, 214, cols.166-168.

<sup>26</sup> PL, 214, cols.168-169.

<sup>27</sup> PL, 214, cols.168-171. モー公会議の決議は Mansi, *Sacrorum Conciliorum nova et amplissima collectio*, 22, col.746.

<sup>28</sup> PL, 214, cols.172-175.

<sup>29</sup> PL, 214, cols.175-177. カンタベリ大司教選任問題については、城戸毅『マグナ・カルタの世紀——中世イギリスの政治と国制 1190-1307——』。東京大学出版会、1980年、37～44頁。

<sup>30</sup> PL, 214, cols.177-203.

<sup>31</sup> J.C.Moore, *Innocent III: to root up and to plant*, Brill Leiden-Boston, 2003, pp. 84-85, 91, 95, 129-130.

<sup>32</sup> PL, 214, col.56.

<sup>33</sup> PL, 214, cols.203-212.

<sup>34</sup> Bolton, *op. cit.*, p.90.

また、それは無味乾燥な事実の羅列ではなく、インノケンティウス3世の人間をも描いている。

このように魅力的であり、かつ信頼性も決して低くないインノケンティウス3世の伝記を、一体誰が書いたのであろうか。それが誰であるかを明らかにすることによって、『業績録』の史料としての評価はさらに高まるであろう。章を改めて、『業績録』の内容から浮かんでくる著者の特徴について検討しよう。

## 2. 著者の条件

では、『業績録』の内容から著者はどのような人物であったと言えるであろうか。

まず、著者はインノケンティウス3世を個人的に知っており、彼を恒常的に近くから観察でき、おそらく教皇庁のメンバーであったと思われる<sup>35</sup>。おそくともインノケンティウス3世登位前後には教皇庁にいたであろう。M.L.Taylorは教皇聖別式の詳細な記述は、著者がそれに出席したことを示唆している、と言っている<sup>36</sup>。『業績録』には、著者自身が目撃したことを書いたと思われる箇所も少なくない。他方、文書庫にも自由に出入りし、資料として用いたようである<sup>37</sup>。とりわけ第4回十字軍や東方教会との統一問題で、『業績録』は内部資料をおもに用いている。

業績録はインノケンティウスの在位前半の問題を均等には扱っていない。教皇国家回復運動、シチリア王国での闘争、フランス王の結婚問題、第4回十字軍と教会統一問題などがとりわけ詳述されているが、それは著者が直接かかわった、あるいは強い関心を持った事柄に重点が置かれたためと考えられる。

著者はインノケンティウス3世を支持し、彼を賞讃していた。先述のように、教皇庁の職員に手数料取得を禁じたり、ラテラノ宮殿内から両替商を追い出したりしたことを伝える。また、罰せられたヒルデスハイム司教コンラートが銀の器を教皇に贈って赦しを願った時、インノケンティウスはそれを迷いつつも受け取ったが、赦すつもりはなかったので、より高価な金のカップを贈って司教の願いを退けた、という<sup>38</sup>。このエピソードもインノ

ケンティウスが清廉潔白で、賄賂で動かない人物であったことを強調している。

また、奇跡譚のようなエピソードも取り入れられている。インノケンティウス3世が教皇に選出された時、3羽の鳩が飛んできてその中でもっとも白い1羽が彼の右腕に留まった、さらにロタリオが教会を象徴する彼の母と結婚すると告げられる幻覚を見た、他の者もさまざまな兆候を見たなどという<sup>39</sup>。これらのエピソードで著者は、インノケンティウス3世が神に望まれた教皇であることを示そうとしたのであろう。一方、教皇自身はこれらのことを人に伝えることを望まなかったとして、彼の謙虚さを際立たせている<sup>40</sup>。

また『業績録』は法律家としてのインノケンティウスを高く評価し、先述のように、教皇庁で彼が行う裁判に多くの学者や法律家を通い、彼の正確さと思慮に驚き、大学より多くを学んだ、と伝えている。近年Penningtonはインノケンティウス3世を教会法学者とすることに疑問を提示した<sup>41</sup>。筆者は教会法学者というより、実務的な法律家であったと考える方がよいのではないかと考えている。

著者自身が法に通じていたこともしばしば指摘される<sup>42</sup>。なぜなら、『業績録』の41章から45章で扱われている問題、たとえばランベスをめぐるカンタベリ大司教とクライスト教会の修道士の争いやミラノ大司教とスコズラ修道院の係争などが、それにかかわらなければ知らないであろう微妙な法的問題を扱っているからである<sup>43</sup>。

著者が南イタリアの事情に精通していたことも多くの史家が認めている<sup>44</sup>。確かに、インノケンティウス登位後の南イタリアの君主や貴族、聖職者、都市の動向が詳細に記されている。

<sup>39</sup> PL, 214, col.19.

<sup>40</sup> PL, 214, col.20.

<sup>41</sup> PL, 214, col.80. 近年、彼を教会法学者と見るか、神学者と見るかについては論争がある。K. Pennington, *The Legal Education of Pope Innocent III, Bulletin of Medieval Canon Law*, 4(1974), 1993. Id., *Further Thoughts on Pope Innocent III's Knowledge of Law, Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Kanonistische Abteilung* 71 (1986). 拙稿「教皇インノケンティウス3世とフグッキオ」『神戸海星女子学院大学研究紀要』47号、2010年。

<sup>42</sup> *Ibid.*

<sup>43</sup> Powell, *op. cit.*, p.59.

<sup>44</sup> *Deeds*, p.xiii.

<sup>35</sup> Bolton, *op. cit.*, p.91. *Deeds*, p.xiii.

<sup>36</sup> M.L.Taylor, *The election of Innocent III*, in: *The Church and sovereignty c.590-1918: essays in honour of Michael Wilks*, ed. by Diana Wood, Blackwell, 1991, p.111.

<sup>37</sup> Bolton, *op. cit.*, p.97; Powell, *op. cit.*, p.55.

<sup>38</sup> PL, 214, col.87.

そして『業績録』は1203年頃から記述法が大きく変化する。すなわち、それまでは叙述が中心であったが、それ以後は書簡集のようになるのである。また1208年で記述が終わっている。著者の人生に1203年前後と1208年前後に、大きな変化が訪れたのであろうか。

著者はインノケンティウス3世の熱烈な賞賛者で、教皇にそばで仕え、法律に精通した人物であった。ではこのような条件に合うのは誰であるのか。次章では、当時教皇庁にいた人物で著者に該当しそうな候補者を挙げ、検討していく。

### 3. 著者の候補者

『業績録』の著者は当時教皇庁にいた高位聖職者とされる<sup>45</sup>。そこで、インノケンティウス時代の枢機卿の中から候補者を探してみたい。

インノケンティウス3世時代、多くの枢機卿が彼の手足となって活動した。彼らの働きなくして、教皇権の最盛期はなかったであろう。その枢機卿たちの経歴、活動について詳細に研究したのはW.Maleczekである<sup>46</sup>。彼の研究を用いて、南イタリアと関係があり、1208年に降まで生存した枢機卿の経歴を検討する。

出身地にかんする情報が全くない者もいるが、当時の教皇庁で南イタリア出身と知られているのは次のような人々である。すでに枢機卿になっていた人では、ジョヴァンニ・ダ・サレルノとピエトロ・カプアーノが挙げられる。

ジョヴァンニ・ダ・サレルノは、前任のケレスティヌス3世時代からとくにドイツで活躍し、ロジャ・オヴ・ハウデンによると教皇選挙でインノケンティウス3世と競り合った人物とされている<sup>47</sup>。しかし、インノケンティウスにすぐに重く用いられ、まず、南イタリアでマルクヴァルトとの闘争にかかわったことが『業績録』に記されており<sup>48</sup>、その後イングランドやアイルランド、スコットランドで活動した<sup>49</sup>。彼が1208年に死去したことも、『業績録』が1208年に終わっていることと符合しているようにも思える。しかし、彼

は1201年にスコットランドとアイルランドでの特使として派遣され、1203年初頭に戻るまでローマを留守にしていたのだが、1202年前後については、『業績録』ではおもに第4回十字軍やローマでの反教皇派との闘争などが書かれているが、イングランドやスコットランドについては、カンタベリー大司教選任問題が起こる以前については、ほとんど何も書いていない。フランス王の結婚問題にもかかわらなかったようである。また、1198年の時点で年齢でも実績でもはるかに上回るジョヴァンニがインノケンティウス3世の崇拝者であることも、不自然に思われる。

ピエトロ・カプアーノはすぐれた神学者であり、『神学大全』を遺している<sup>50</sup>。南イタリアのアマルフィで生まれた彼は、ケレスティヌス3世により1193年に聖マリア・イン・ヴィアラータ助祭枢機卿とされ、またシチリア王国の教皇特使に任命されていた<sup>51</sup>。従って、南イタリアに深い関係があっただけでなく、その事情に精通していたと思われる。

その後、東欧での特使となって活動し、1198年の教皇選挙にはおそらく参加できなかった。インノケンティウスは彼を十字軍勧説のための特使とし、ピエトロはフランス王とイングランド王の対立を調停し、その後フランス王の結婚問題にかかわった。

1200年初頭に教皇庁に戻り、まもなく聖マルチェッロ司祭枢機卿に昇格、教皇庁では教皇裁判所でのさまざまな任務が任された。その後、第4回十字軍に深くかかわり<sup>52</sup>、1202年にはヴェネツィアに行き、一時ローマに戻った後、1203年4月には海路アッコに赴いた。1204年秋、ラテン帝国のコンスタンティノーブルに行き、特使としてギリシャ教会との統一問題を進めようとしたが失敗、挙げ句の果てに十字軍失敗の責任を教皇に押しつけられる始末であった。1206年にいったん聖地に戻ったが、その年の秋から翌年初頭にイタリアに帰り、以後重要な任務を果たすことなく、1214年にヴィテルボで死去した。

ピエトロ・カプアーノの経歴は、『業績録』の著者としてふさわしいようにも思われる。彼は南イタリアでのドイツ勢力との闘争にかかわった。フランス王の結婚問題も『業績録』で詳しく扱われるテーマである。彼が深くか

<sup>45</sup> Bolton, *op. cit.*, p.97.

<sup>46</sup> W.Maleczek, *Papst und Kardinalskolleg von 1191 bis 1216*, Wien, 1984.

<sup>47</sup> Roger of Howden, *op. cit.*, p.174.

<sup>48</sup> *PL*, 214, col.41.

<sup>49</sup> Maleczek, *op. cit.* pp.107-109.

<sup>50</sup> M・グラープマン『カトリック神学史』（下宮守之・藤代幸一訳）、創造社、1971年、58頁。

<sup>51</sup> Maleczek, *op. cit.* pp.117-124.

<sup>52</sup> *PL*, 214, cols.89 ff.

かわった第4回十字軍にも、書簡の引用が中心であるが、多くの章が割かれている。ピエトロ・カプアーノは再三、『業績録』に現れている。また教皇裁判所でしばしば職務を与えられているので、教会法にも精通していたと思われる。

しかし、ピエトロは1198年8月から1200年初頭まで教皇庁を離れ、その後1202年7月からヴェネツィアに赴き、一時帰還したが、1204年秋にコンスタンティノープルに向かい、1206年末か1207年にローマに戻るというふうに、たびたび教皇庁を離れている。従って、インノケンティウスを恒常的に近くから観察することはできなかった。また、インノケンティウスより年長で、パリで神学を教え、『神学大全』を著していた大神学者である彼が、インノケンティウスの崇拜者であったというのも、信じがたい。また1207年頃、教皇庁に戻った彼は、以後あまり重要な役割を果たしていない。従って、時間的余裕ができたはずであるのに、『業績録』を放棄したのはなぜか。もっともヴェネツィア、コンスタンティノープル、聖地と飛び回って働いたのに、結局失敗の責任を押しつけた教皇に愛想を尽かしたのかも知れない。しかし、1205年7月にインノケンティウス3世がピエトロを非難したのだが<sup>53</sup>、それ以後もしばらく『業績録』は続いており、またそこにインノケンティウスに対する怒りは感じられない。

南イタリア出身でなくても、南イタリアで活動し、関心を持っていたであろう枢機卿を挙げてみよう。

ジョヴァンニ・ディ・サン・パオロは、出身地は明らかでないが、サレルノ大学で医学を学んだ<sup>54</sup>。ケレスティヌス3世によって枢機卿に任命され、たびたび教皇裁判所で職務を委ねられたが、特使として派遣されることはなかった。ケレスティヌスはジョヴァンニを常にそばに置き、後継者にしようとしたという<sup>55</sup>。インノケンティウス3世は彼をキンティウスとともにマルクヴァルトに対抗するため、マルカ・ダンコーナに送り、その任務の後、フランスに派遣し<sup>56</sup>、アルビジョワ派の問題に当たらせ、それからフランス王フィリップ2世の結婚問題にかかわらせた<sup>57</sup>。1204年末にサビーナ司教枢機卿に昇進、その

後ほぼ教皇庁に留まっている。彼は小さき兄弟団の初期の保護者の1人で、1210年にアッシジの聖フランチェスコの正統信仰を調査して教皇の前で彼を支持し、教皇はフランチェスコに口頭で承認を与えた<sup>58</sup>。

彼についても、『業績録』との関係はあまり認められない。たしかに、南イタリアに関心があり、ドイツ勢力との闘争にも深くかかわった。またフランス王の結婚問題にも対応している。しかし、年長であり、ケレスティヌスの時代に教皇にもっとも信頼された者が、どちらかと言えば日陰の身であったインノケンティウスを崇拜していたとは、あまりありそうにない。また1208年に筆を折ったことも説明できないし、とくに彼が支持したフランチェスコなどの新しい宗教運動についてまったく言及していないことは、理解に苦しむ。

では、南イタリア出身でなくても南イタリアでドイツ勢力との闘争にかかわった枢機卿はどうであろうか。

ピエトロ・ガロチャはインノケンティウスが枢機卿時代、著書『人間の状態の悲惨について *De miseria humanae conditionis*』<sup>59</sup>を献呈した人物で、ローマ貴族の出身であった<sup>60</sup>。1201年にインノケンティウスは彼を特使としてシチリア王国に派遣し、マルクヴァルトとの闘争とゴージェ・ド・ブリエンヌ支援を遂行した<sup>61</sup>。1203年からは教皇庁に留まり、1204年に戴冠のためにローマに来たアラゴン王ペドロの塗油式を行った。教皇裁判所でもさまざまな職務を果たした。ペトルスは1211年頃死去した。

南イタリアでの闘争にかかわり、『業績録』に記述があるアラゴン王の戴冠式で重要な役割を果たし、教会裁判所でも活動しているが、その他のことでは『業績録』とのかかわりは認められない。ピエトロの場合も、むしろ敬意を持っていたのはロタリオの方であり、ピエトロがインノケンティウスの崇拜者であったとは考えられない。

<sup>53</sup> *PL*, 214, cols.699-702.

<sup>54</sup> Maleczek, *op. cit.* pp.114-118.

<sup>55</sup> Roger of Howden, *op. cit.*, p.32.

<sup>56</sup> *PL*, 214, col.22.

<sup>57</sup> *PL*, 214, col.101.

<sup>58</sup> チェラーノのトマス『聖フランシスコの第一伝記』(石井健吾訳)、あかし書房、1989年、63~64頁。Maleczek, *op. cit.* p.117.

<sup>59</sup> *PL*, 217, cols.701-746. Lotario dei Segni, (Pope Innocent III), *De Miseria Condicionis Humane*, ed. by Robert E.Lewis, The University of Georgia Press, 1978. ロタリオ・デイ・セニ『人間の悲惨な境遇について』(瀬谷幸男訳)、南雲堂、1999年。

<sup>60</sup> Maleczek, *op. cit.*, pp.95-96.

<sup>61</sup> *PL*, 214, col.61.

グイード・デ・パパはローマの名門デ・パパ家に属していた<sup>62</sup>。この家はかつてインノケンティウス2世を輩出した。兄弟にはローマの元老院議員を務めた者もいる。1190年にクレメンヌ3世によって助祭枢機卿に任命された。インノケンティウス3世時代に彼はマルクヴァルトのもとにオスティア司教枢機卿オッタヴィオや聖エウスタキオ助祭枢機卿ウゴリーノとともに派遣され、聖ペトロ世襲領とシチリア王国の国境について交渉した<sup>63</sup>。1200年以降は中部イタリアで活動した。その後1206年にプレネスティ司教枢機卿に昇格するが、ほとんどずっと教皇の傍らにおり、目立った活動はなく、1221年に死去した。

グイードの場合も、マルクヴァルトとの交渉と長期間教皇のそばにいたことだけで、他に『業績録』の著者とする根拠は乏しい。

キンティウスはローマ出身で、マギステルの肩書きを持っていた<sup>64</sup>。1190年にクレメンヌ3世によって枢機卿に任命され、その後北欧で特使職を務めた。インノケンティウス3世のもとではマルクヴァルトに対抗するため、1198年にマルカ・ダンコーナに、1199年にはシチリアに派遣された。1205年再びマルカに派遣され、翌年、帝国軍を撃破した。彼も教皇裁判所で聴取官に任命され、1209年にはインノケンティウスから長い書簡の法律相談を受け取っている。ホノリウス3世は彼をポルト司教枢機卿に昇格させた。1217年7月以降に死去した。

キンティウスの場合、南イタリアとシチリアでマルクヴァルトに対抗したことと、教皇裁判所で職務を果たしたことくらいで、『業績録』の著者であることを示す根拠はほとんどない。

次にインノケンティウスが枢機卿に任命した者から候補者を探してみよう。

ウゴリーノは、インノケンティウスの親戚で、後の教皇グレゴリウス9世である<sup>65</sup>。彼はアナーニに生まれ、パリに留学した。そこでおそらくピエトロ・カプアーノや後のインノケンティウス3世であるロタリオ・ダ・セーニと知り合った。彼はすぐれた教会法学者であったが、ボローニャで学んだという確証はない。1198年にインノケンティウス3世が彼を助祭枢機卿に任命した。彼は先述したオッタヴィオやグイードとともにマルクヴァル

トに対応した。『業績録』にも彼がマルクヴァルトの交渉のために南イタリアに派遣されたことが記されている<sup>66</sup>。1202年には特使としてシチリアに赴いた。

彼は法律への造詣を賞讃され、しばしば教皇裁判所で聴取官を務めた。1206年にはオッタヴィオの後を受けてオスティア司教枢機卿に昇格、1207年から1209年にかけて、彼はドイツで特使として活動し、帝位争いの中で困難な任務を遂行した。当初はフィリップ・フォン・シュヴァーベンを支持したが、彼が暗殺されたため、今度はそのライバルであったオットー・フォン・ブラウンシュヴァイクと交渉せねばならなくなる。

ウゴリーノは枢機卿団の中心的人物で、インノケンティウスの信頼する人物であった。ジョヴァンニ・ディ・サン・パオロ亡き後、フランチェスコを擁護したのは彼であった。その影響力はホノリウス3世時代にも維持され、ホノリウスの死後1227年に教皇の地位に登りつめることになるのである。

ウゴリーノは南イタリアにも深い関心を持ち、マルクヴァルトとの闘争にも関わった。教会法学者としても有名で、後に教皇として『教皇令集五巻』の編纂を命じた。インノケンティウスとは正確な関係は分からないが、親戚と言われている。彼に枢機卿に任命されたのだから恩義もあり、側近として重要な役割を果たしているのを見ても、彼に深い敬意を持っていたことも十分に考えられる。しかし、早くから教皇の信頼を得て枢機卿団の中心的位置を占め、1206年にはオスティア司教枢機卿に昇格した彼に、『業績録』執筆の時間的余裕はなかったであろう。また『業績録』が途切れる1208年に、何らかの変化があったことは確認できない。

ジョヴァンニ・フェレンティーノはラティウム南部のフェレンティーノの出身である<sup>67</sup>。インノケンティウス3世によって教皇庁に入り、1204年に助祭枢機卿に任命された。1206年、おそらくカンタベリ大司教ヒュバート・ウォルター死後の情報を得るためにイングランドに派遣され11月まで滞在した。1212年、聖ブラッセデー司祭枢機卿に昇格した。ジョヴァンニはたびたび教皇裁判所で聴取官に任命されている。第4回ラテラノ公会議にも出席したが、その後、まもなく亡くなった。ジョヴァンニの場合も『業績録』の著者とする根拠はあまりない。

<sup>62</sup> Maleczek, *op. cit.*, pp.99-101.

<sup>63</sup> *PL*, 214, cols.23, 44.

<sup>64</sup> Maleczek, *op. cit.*, pp.104-106.

<sup>65</sup> *Ibid.*, pp.126-133.

<sup>66</sup> *PL*, 214, col.44.

<sup>67</sup> Maleczek, *op. cit.*, pp.146-147.

オスティア司教枢機卿とは別のオッタヴィオはインノケンティウス3世の従兄弟であったが、彼についてはほとんど史料がない<sup>68</sup>。インノケンティウス3世のもとで教皇庁に入り、『業績録』は彼がマルクヴァルトの闘争時の1199年に枢機卿ジョルダノーらとともに南イタリアに派遣されたことを伝えている<sup>69</sup>。1200年6月から1204年には教皇財務局長の任にあった。1206年に助祭枢機卿となり、その後は1234年に死去するまで、ほとんど教皇庁を離れなかった。オッタヴィオの場合は、彼自身についての情報が少なく、『業績録』の著者としての根拠も乏しい。

南イタリアと関係があり、12世紀末には教皇庁入りしていたインノケンティウス3世時代の枢機卿を検討してきた。彼らの中に『業績録』の著者ではないと言い切れる人物はいないかも知れないが、積極的にそれを主張できる者もいなかった。しかし、もう1人、決定的証拠があるわけではないが、『業績録』の著者にもっともふさわしいと思われる人物がいる。Powellが有力候補とするピエトロ・ベネヴェンターノである。次に、章を改めてピエトロ・ベネヴェンターノについて検討したい。

#### 4. ピエトロ・ベネヴェンターノについて

では、まずMaleczekの研究を用いて、ピエトロ・ベネヴェンターノの活動を見てみよう<sup>70</sup>。

ピエトロ・ベネヴェンターノは、南イタリアのベネヴェント地方の出身である。おそらくボローニャで学び、教会法のマギステルの称号を得た。PowellやSayersはこの時期にロタリオを知りあったと推測している<sup>71</sup>。インノケンティウス3世が彼を助祭に叙品したが、これがいつのことなのかは明らかでない。

Maleczekによると、その後の彼にかんする史料は1209年までなく、この時にピエトロは教皇から登位以来12年間の教皇令を収集するよう命じられた。これは後に『第三集成 *Compilatio Tertia*』と呼ばれ、最初の教皇公認の教皇令集となり、ボローニャ大学に送られて、講義と裁判の基礎となった<sup>72</sup>。

<sup>68</sup> *Ibid.*, p.163.

<sup>69</sup> *PL*, 214, col.42.

<sup>70</sup> Maleczek, *op. cit.*, pp.172-174.

<sup>71</sup> Powell, *op. cit.*, p.54; Sayers, *op. cit.*, p.23.

<sup>72</sup> Moore, *op. cit.*, p.186. ピエトロの『第三集成』の教会法集成における位置については、K.Pennington, *Decretal Collections 1190-1234*, in: ed. W.Hartmann and K.Penning-

ピエトロはこの功績で1212年に聖マリヤ・ア・イン・アクイロ助祭枢機卿に任命される。その直後、彼は教皇庁裁判所で聴取官 *auditor* を初めて務めたことが確認される。

1214年初頭ピエトロはアルビジョワ十字軍が戦っている南フランスに特使として派遣された。彼はシモン・ド・モンフォールの侵略を抑えるとともに、ミュレの戦いで彼の捕虜となったアラゴン王子ジャウメを受け取り、アラゴンに送り届ける任務を果たした。それからしばらく南フランスで活動した後、ローマに戻って第4回ラテラノ公会議に出席した。1216年、教皇はピエトロを聖ロレンツォ・イン・ダマソ司祭枢機卿に昇格させ、インノケンティウスの死後、跡を継いだホノリウス3世が1217年に聖サビーナ司教枢機卿に昇進させた。ピエトロは1219年か1220年に亡くなった。

ピエトロ・ベネヴェンターノについて Maleczek が明らかにしたのは、おもに『業績録』が途切れた1209年以降である。では、それ以前彼はどこで何をしていたのか。

彼が1209年以前に教皇庁にいたことの明確な言及は、Maleczekは触れていないが、エヴシャム年代記に見られる。1205年10月にエヴシャム修道院長であったトマス・オヴ・マルバラはウスター司教モーガーとローマで裁判を争ったのだが、そのとき教皇の聖堂付司祭であったピエトロを「教皇庁の弁護士第1人者」と見なしたのである<sup>73</sup>。1205年の時点でピエトロは教皇庁に入っていたことはもちろん、法律家として評価を確立していたことが窺える。

それより数ヶ月前の7月、インノケンティウス3世はフランス王に幽閉されていたエタンブ城の妃インゲボルクを慰めるため、教皇聖堂付司祭のマギステルPを送った、と書簡に書いている<sup>74</sup>。『業績録』も教皇がインゲ

ton, *The History of Medieval Canon Law in the Classical Period, 1140-1234*, Washington, D.C., 2008, pp.306-316.

<sup>73</sup> Thomas of Marlborough, *History of the Abbey of Evesham*, ed. et tr. by J.Sayers and L.Watkiss, Clarendon Press, 2003, pp.284-285. "... magistrum Petrum Beneuentanum ... qui primus habebatur inter aduocatos curie." Powell, *op. cit.*, pp.55-56.

<sup>74</sup> R.Foreville, *Le Pape Innocent III et la France*, Anton Heirseemann Stuttgart, 1992, p.301; Powell, *op. cit.*, p.56; A.Potthast, *Re-gesta Pontificum Romanorum I*, p.219, n.2560; *PL* 215, col.680.



ボルクに使者を送ったことを記しているが、使者の名前は伝えていない<sup>75</sup>。教皇聖堂付司祭でマギステルの称号を持ち、頭文字がなのはピエトロ・ベネヴェンターノにおいて他にいないだろう。R.ForevilleもPowellもPをピエトロとしている。当時教皇聖堂付司祭でフィリップという人物もいたが、彼ならマギステルPh.またはPhil.と略されるであろう<sup>76</sup>。ピエトロ・ベネヴェンターヌスがフランスに送られたのなら、『業績録』がフランス王の結婚問題について詳細に伝えていること、また王妃に同情的なことからも、『業績録』の著者はますます、このピエトロと考えられよう。

さらに遡り、1203年1月10日の書簡で、インノケンティウスはペポ・ディ・カンピリアとその兄弟の破門を一定の条件で解除するために、キウージ司教ランフランク、ラディコファーニ城主オドとともに教皇書記マギステルPを指名した<sup>77</sup>。Powellによれば、この時期に教皇書記でマギステルPとされる者はピエトロ・ベネヴェンターノ以外にいない。このようにピエトロは1209年以前から教皇庁で重要な役割を果たしていたのである。

では、1208年に『業績録』の記述が終わるのはなぜか。先述したように、ピエトロはその翌年にインノケンティウス3世から重大な任務を与えられている。教皇がこれまで発した教皇令の集成である。Powellは、この任務のためにピエトロは『業績録』叙述を諦めざるを得なくなった、と主張する<sup>78</sup>。ピエトロはこの仕事を終えた後、南フランスに派遣され、シモン・ド・モンフォルからアラゴン王子ジャウメを受け取ってアラゴンまで送り届け、1216年には司教枢機卿、翌年にはホノリウス3世により司教枢機卿と昇格したので、『業績録』執筆は再開できなかったであろう。

1203年から詳細な叙述が、書簡の掲載を中心とする形に変わっていることについて、Powellはピエトロが1204年か1205年に教皇聖堂に入り、忙しくなったためとしている<sup>79</sup>。しかし、筆者は次のように考える。南イタリアの情勢は、カンパーニヤ地方のベネヴェントという南イタリアのドイツ勢力との

闘争のまっただ中の出身者であり、その経過が一族の浮沈に決定的な影響があるピエトロにとって重大な関心事であった。彼が南イタリアで教皇庁職員として活動したかどうかは明らかでないが、彼にとってこの問題はきわめて重要であった。だから、『業績録』ではドイツでの帝位継承争いにはほとんど目を向けることなく、ずっと南イタリアの動きを追ったのであろう。

フランス王と王妃インゲボルクの問題に関しては、彼自身が直接かかわったので、詳細に記述したと考えられる。

しかし、第4回十字軍とラテン帝国、あるいは東方教会との統一問題については、彼が直接かかわったわけではなかった。もちろん教皇権にとってきわめて重大な問題であるのでこれについて記述したのであろうが、彼自身は深く関与しているわけでも、それほど情報を集めているわけでもなかった。書簡集のような形になっているのは、彼自身が集めた情報が十分でないので、教皇庁で閲覧できた書簡を中心にしたためではなかろうか。実際、『業績録』の最後の部分は、先述したように多少内容の混乱が認められるが、1203年以降も続くローマでの反教皇派の活動などについては叙述中心で書かれている<sup>80</sup>。

以上のように、ピエトロは『業績録』の著者としてふさわしいように思われる。彼は南イタリア出身で、当然その情勢に強い関心を持っていた。彼は教皇庁で法律家として評価されており、さまざまな訴訟を任せただけでなく、インノケンティウスの裁判にもしばしば出席したであろう。インノケンティウスの教皇庁での活動にも詳しくははずである。インノケンティウスが彼に教皇令の編纂を命じたのも、彼の教会法学者としての能力だけでなく、ピエトロがそばにいて教皇の思想や論理を理解していると信頼していたからであろう。

インゲボルクの問題についても、彼が直接かかわったという可能性は高いと思われる。先述したように、第4回十字軍とラテン帝国の問題については、彼自身が直接かかわらず、十分な情報を得ていなかったので、関係する書簡を集めるという形を中心にして記したのであろう。

1209年には教皇から彼の教皇令の編纂を命じられた。このことが『業績録』執筆の時間的余裕を奪ったのであろう。

<sup>75</sup> PL, 214, col.102.

<sup>76</sup> Powell, *op. cit.*, p.56, n.22.

<sup>77</sup> *Ibid.*, pp.56-57; Potthast, *op. cit.*, p.158, n. 1804; PL, 215, col. 1147.

<sup>78</sup> Powell, *op. cit.*, p.57.

<sup>79</sup> *Ibid.*

<sup>80</sup> PL, 214, cols.177-203.

また、『業績録』にはピエトロ・ベネヴェンターノの名前が現れない。ピエトロが関与したと思われる問題についても詳しく述べられているが、そこには彼の名前は現れない。このことが逆に彼が著者であることを示しているように、筆者には思われる。

確かに、ピエトロ・ベネヴェンターノが『業績録』の著者であるという確たる証拠はない。しかし、以上のように、彼の関心、活動領域などに『業績録』はうまく一致している。彼がより多忙となったと考えられる1208年に叙述が終わるのも、整合的である。ピエトロ・ベネヴェンターノが著者であることは可能性がかなり高いと思われる。

### おわりに

『教皇伝記Liber Pontificalis』にはマルティン・フォン・トロパウによるインノケンティウスの公式の伝記が収められている。しかし、それは13世紀後半に書かれた、『業績録』よりはるかに短く、教皇のキャリアの概略を描いただけの、靈感にも乏しい代物である<sup>81</sup>。これに較べれば『業績録』ははるかに詳細で生き生きした、魅力的な史料ということができよう<sup>82</sup>。

『業績録』は教皇インノケンティウス3世を知るためにも、また登位直後の教皇領回復運動やフランス王の結婚問題、ローマ市をめぐる状況などについても貴重な情報を提供してくれる史料である。かつてはインノケンティウス3世の崇拜者が書いた客観性に欠ける史料と軽視されてきた。たしかにインノケンティウス3世寄りではあるが、事実をねじ曲げているわけではない。1208年に終わり、内容はいくつかの問題に偏ってはいるが、インノケンティウスのそば近くで仕えた、すぐれた外交官で、教会法にも精通し、インノケンティウスが信頼した側近による伝記なのである<sup>83</sup>。『業績録』の著者がピエトロ・ベネヴェンターノであるなら、その信頼性、史料的価値はさらに高まるであろう。

そして、このような教皇庁の職員や枢機卿がインノケンティウス3世を支えたのである。中世教皇権の最盛期はインノケンティウス3世のみによってもたらされたのではない。彼のもとで働く枢機卿を初めとする教皇庁の構成員がいて初めて可能となったのである<sup>84</sup>。

インノケンティウス3世は経験豊富な枢機卿を駆使して自らの政策を実行した。従って、インノケンティウス3世時代の教皇権の機能を理解するには、枢機卿の研究が不可欠である。今後の課題として、そのような枢機卿たちの活動を検討することにより、インノケンティウス3世の教皇庁がどのように政策を遂行していったかを明らかにしていきたい。

<sup>81</sup> *Deeds*, pp.260-270.に英訳されている。

<sup>82</sup> Bolton, *op. cit.*, p.90.

<sup>83</sup> *Ibid.*, p.91.

<sup>84</sup> Maleczek, *op. cit.* passim.